

石郡英一の

## “老話”

介護職に聞いてほしい  
高齢者と家族の物語

## 第4話

イェライシャン  
夜来香②

いしこおり・えいいち

日本福祉介護総研株式会社代表取締役会長。医療・介護運営教育コンサルタント。看護師／救急救命士。学校法人美芸学園理事。病棟看護長、老健管理部長、身体障害者療護施設事務長を経て、介護保険施設などの運営教育コンサルタントを行う会社を設立。役者かと思うほどの演技とユーモア、現場の方が、思わずうなずいてしまう体験を豊富に持っている人気の講師。主な著書に『介護現場の困ったスタッフを戦力に変える指導法』『医療依存度の高い高齢者のケア』『身体機能の低下した重度利用者のケア』『石郡流 施設看護師のデキる仕事術』（いずれも日経研出版）がある。

## 前回のあらすじ

成輪誠治と妻の頼子は、誠治の定年退職に伴い、東京の自宅を売却し、長野県の小布施町での悠々自適なスローライフを楽しんでいた。しかし、誠治の突然の死をきっかけに、頼子はほとんど自宅に引き籠って生活するようになってしまった。すっかり生きる気力を失っていた頼子だったが、生き甲斐を求め、高齢者に仕事を斡旋しているNPO法人「高齢働ら栗事業団」の荒木に偶然出会い、事業への参画を勧誘される。頼子と誠治にとって思い出の花である夜来香の香りがする荒木からの誘いに運命を感じ、もう一度社会へ出てみようと思える頼子だったが…

荒木と出会ってから2週間後、頼子は意を決してNPO法人「高齢働ら栗事業団」の事務所を尋ねてみた。事業の内容を詳しく説明してもらい、働くことへの意欲が湧いてきた頼子は、その場で事業団への登録を決めた。そして、事業団が請け負っている仕事のリストの中から「長年の主婦経験が活かせるのでは」との思いから食品製造販売部門に属する、株式会社食分という給食業者の製造の仕事を選択した。

翌日頼子は、スタッフと一緒に株式会社食分に出向き、人事を担当する工場長の石井琢磨と面接し、その場で弁当製造工場での採用が決まった。

## 1. 出会い

〈1〉

頼子は「高齢働ら栗事業団」に登録した2日後から、事業団からの派遣として株式会社食分の給食工場に通うことになった。勤務はシフト制で、決められた日に、頼子の自宅から車で20分程かかる須坂市にある工場まで事業団の車の送り迎え付きで週5日勤務することになった。勤務時間は毎朝5時から9時半までの4.5時間の就労で、時給は820円と決められた。

株式会社食分は、本社を長野市に構える創業58年の会社で、資本金5千万円、売上高年商約32億円。従業員数200余人、パート者数800余人の企業で、長野市を中心として、企業、学校、

病院、介護施設の食事サービスや、在宅配食サービスなどを主な事業として運営している。

頼子は在宅配食サービス部門の弁当製造工場に配属され、就労内容は約2,000食の昼食配達用の弁当作りの作業と、夕食用弁当の仕込み作業であった。

頼子にとって就労は約40年振りのことであった。結婚してからずっと、社会と自分との間にはいつも誠治がいて守ってくれていたもので、就労に対しての不安は否めなかった。しかし、一人で過ごすことの孤独と先行きの不安を想えば、社会参加して就労できる喜びの方が、就労に対する不安より勝っていた。

実際、仕事に就いてみると、職場の同僚はほとんどが40代後半から60代前半の女性で、8割以上がパートであったため、頼子にとってかわりやすい職場環境と云えた。その上、女性が多く集う職場の典型で、賑やかな職場であったため、孤独から一変に解放された気分となり、不安どころか毎日の出勤が楽しみとなった。

また、人間関係だけでなく、好きな食事作りに携わることのできる満足感で心が弾み、さらに身体的にも、農作業で培われた体力のお蔭か、農作業より身体がずっと楽に感じ、自分でも不思議なくらいに身体が動いた。

〈2〉

株式会社食分の須坂工場長の田辺礼子は、地元の須坂市に住

む52歳になる女性で、高校卒業後より株式会社食分で働きはじめて、今年で34年目を迎える工場最古参の社員である。

礼子の夫である田辺雄一も株式会社食分の社員で、社内結婚だった。

雄一は52歳になる、物静かな真面目な男性で、10年前に須坂の工場長を礼子に引き継ぎ、本社総務部長として、長野の本社に栄転した。

一方、礼子は歯に衣着せぬ物言いをする気風の良い女性で、工場の主と云える存在であったが、工場の事務所奥に鎮座する1人の女性には頭が上がりなかった。

その女性は、田辺民子という72歳になる雄一の母で、礼子の義母に当たる人物だった。民子は私生活においては穏やかで優しく、かつ思慮深く、仕事においては並外れた業を持ち合わせており、礼子が公私にわたり最も尊敬する人物だった。

民子も須坂工場の元社員だった。民子は長野市の生まれで、高校卒業後、長野市内にあった株式会社食分に就職した。

民子は、株式会社食分の創設者で初代社長の田中寅吉に気に入られ、20歳の時に田中の子を身籠った。この時、田中には妻子が居たため、民子は田中の計らいにより、須坂市に一軒家を与えられ、そこに居を移して住み、田中に雄一と名付けられた子どもを生んでからは、田中が

新設した須坂市の給食工場で働きながら、一人で雄一を育て上げた。

当時民子は、おなかの子ども父親を明かせなかったことで、激怒した親に勘当され、逃げるように須坂市に住み着いたが、須坂市での生活は公私にわたり、山本学という男性に守られた。

山本は田中の懐刀として、田中に忠心していた初代須坂工場長で、田中から唯一民子の事情を知らされていた人物であった。民子は、山本に守られながら、夫は事故で死別したと偽り、内情を誰にも知られずに過ごしてきた。

しかし、民子が山本に守られた理由は、単に田中の妾ということだけではなかった。なぜならば民子は、人並み外れた味のセンスと味覚を持ち合わせていたからである。民子の作る惣菜は、何を作っても旨味のあるおいしい物ができた。その上、民子は惣菜の味見をするだけで、惣菜が含む数グラムの塩分の違いを見分け、旨味の違いをも見分けることができた。その民子の作るお弁当はすこぶ頗る人気があり、株式会社食分のお弁当は常に完売状態が続いていた。つまり、仕事上、山本にとって民子はなくてはならない存在だった訳である。

しかし、民子の信頼は山本だけではなく、その巧みの業に加えて、口調は丁寧で穏やかだが、凛として味にこだわり、妥協を

許さない姿勢から、工場で働く皆から「味助菩薩」と云われて敬われていた。

そのため民子は、60歳の定年を過ぎても、その巧みの業を活かして、嘱託として70歳まで働いた。その背景には、82歳になつてなお、現役社長として采配を振るう田中の意向が当時の工場長であった雄一を通して指示されていた。

雄一は幼い頃から、田中を母の働く会社の社長として慕ってきた。自分が田中の息子だとは知らない雄一は、大学の学費や仕送りなどを支援してくれる田中への恩義を強く感じていた。田中からの支援は、民子から“会社からの奨学金”と聞かされていたため、創業当時から会社に尽くしてきた母の恩恵を授かっているものだと信じて疑わなかった。

大学を卒業した雄一は、田中への恩義に報いるためにと株式会社食分へ就職し、懸命に働いた。32歳で工場長、42歳の若さで部長へ昇進したのは、いずれも田中の意向でなされた。その過程において、田中の懐刀であった山本が、雄一に対して、将来の社長を育成するための教育を施していたことは云うまでもない。

しかし、公私にわたり田中を支え、雄一を育て上げた山本も、肺癌を患い5年前に他界し、それ以後、雄一の出生の秘密を知る者は、雄一の両親である田中

と民子だけとなった。

田中の妻の聡子は、2年前に肺炎で他界した。聡子には2人の子どもがいたが、いずれも女の子で、それぞれが会社経営者の下へ嫁いでいったため、身内で株式会社食分を継ぐ者がいなかった。そのため田中は“優秀な人材によって会社は引き継がれる”という大義名分を掲げ、自然な形で雄一を社長のいすに座らせようと考えていた。社内でも、田中の後継者は、田中に一番買われている雄一であると専ら噂されるようになっていった。

株式会社食分の世代交代もつづがなく行われていると思われた矢先、70歳を超えた民子の記憶に少しずつ異変が生じはじめた。朝から同じことを繰り返す義母の言動を不審に思った礼子が、認知症外来に連れて行ったところ、レビー小体型認知症との診断を受けたのである。

しかし、認知症と診断されてからも、民子の舌は衰えることはなく、相変わらず惣菜に含まれる数グラムの塩分を舌で見分けることができた。そこで礼子は、認知症によって退職を余儀なくされた民子に、事務所奥のデスクを与え、惣菜の試食係としてボランティアを行わせていた。

<3>

民子の味に妥協を許さない姿勢は、いくつになっても衰えなかった。民子のお墨付きが出なければ、礼子の指示により作業のやり直しを命じられるため、

民子に試食をしてもらう際は皆に緊張が走る。

その緊張を回避するため、試食を持っていく係は、自然と新入職員の役割になっていた。その慣例によって、頼子は株式会社食分に派遣されてからすぐに、民子に惣菜を味見してもらうために試食を持って行く役割、通称“検食係”に指名された。

「成輪さん、昼食の付け合わせのひじきの試食を、大奥をお願いします」

礼子は民子が座する区画を、言わずもがな大奥と呼んでいた。「承知致しました！」

礼子の依頼に頼子は軽快な返事をし、小皿に盛ったひじきを民子の下へ運んだ。

「田辺さん、ひじきの試食をお願いします」

「はい」

民子は、頼子から試食用のひじきを受け取ると、ゆっくりと噛みしめるように試食した。

「ありがとうございます。おいしゅうございました」

民子は頼子に笑顔で会釈した。調理の具合が良い時に放つ“おいしゅうございました”の言葉が、民子の合格の返事だった。「ありがとうございます」

頼子が会釈をして、事務所を去ろうとした瞬間、民子が頼子に語りかけた。

「頼ちゃん、頼ちゃんじゃないの！」

頼子は自分の名前が呼ばれた

ことに驚いた。確かに就職日、事務所にいる民子に挨拶に訪れたが、一介の派遣社員である頼子の名前を、民子が覚えているとは到底思えなかった。それになぜ“頼ちゃん”と愛称で呼ばれたのか不思議に思った。

「久し振りねえ〜。会いたかったわ！ 旦那さん元気？」

民子が誠治の話を持ち出したので、頼子はさらに驚いた。同時に、さまざまな思いが頭の中を巡った。

『民子さんは本当に私と誠治さんのことを知っているの？ それとも皆が噂しているように、民子さんの認知症の症状なの？ いや、もしかすると、昔知り合っていたのではないのかしら？ 私が民子さんと交流があったのにもかかわらず、忘れてしまっているのではないのかしら？ もしそうであるなら、失礼があってはいけない。えっ?! 一体この方は誰？ 昔の職場で田辺さんと仰る方がみえたかしら？ それともご近所に田辺さんと仰る方がみえたかしら？』

頼子は考えがまとまらないまま愛想笑いを返すと、民子が続けた。

「何年振りかしら？ あなたは全然変わらないわね。昔のまま…。こちらに働きにみえたの？」

「いえ…いや、はい…」

頼子は働きにきたことは事実だと思い、返事をしたが、頼子には全く心当たりがなかった。

「仕事なら大丈夫よ。私の目の黒

「うちの、私があなただの事を  
守ってあげるから」

民子がうれしそうに話した。  
「あの……」

頼子が、事情が飲み込めない  
旨を民子に伝えようとすると、  
事務所のドアを開けて礼子が  
入ってきた。すると民子が、礼  
子に向かってうれしそうに語り  
かけた。

「礼子さん、こちら頼ちゃん。私  
の昔からの友人なの。この方は  
人の心を受け止めることのでき  
る優しい方でねえ、人の風を受  
け止めて風車のように立ち回る、  
とてもよい方なの。あなたの力  
になってくれるはずよ、頼ちゃ  
んをよくしてあげてね」

「え！ お義母さんのお友達だっ  
たのですか！ 承知致しました。  
成輪さん、これからよろしくお  
願い致します」

「礼子さん、苗字は分かりにくい  
から、頼ちゃんと呼んであげ  
て。ねっ、頼ちゃんいいでしょ。  
礼子さんは家のお嫁さんなの。  
ねっ、いいでしょ」

「ええ……」

民子のお願いに頼子は戸惑い  
ながら、中途半端に返事をする  
が、礼子は“善は急げ”とばかり  
に頼子に語りかけた。

「では、頼ちゃん、よろしくお願  
い致します」

頼子にとっては、訳も分から  
ず話が展開していったが、もし  
自分の記憶が消失している場合  
は、失礼にあたると思い、思い  
出すまではこのままでよいかと、

その場は遣り過ごすことに  
した。

自宅に帰った頼子は、早  
速仏壇の前に座り、誠治の  
遺影に語りかけた。

「誠治さん、民子さんと仰る  
方をご存じですか？ 私は  
存じ上げないのか、思い出  
せないのかよく分からない

の。でも、分かるのはあの方も  
夜来香だと云うこと。香ってい  
たもの…。民子さんが本当に私  
のことをご存じなのかどうか分  
からないけど、私は“人の風を  
受け止めて風車のように立ち回  
る”風車なんですって…。そう  
なのかなあ…」

## 2. 香り

### <1>

理由は定かではないが、民子  
は頼子のことを“頼ちゃん”と  
愛称で呼ぶようになり、殊の外  
頼子を好んだ。民子を尊敬して  
止まない礼子もそれに倣い、“頼  
ちゃん”という愛称を用いて頼  
子と呼び信頼した。

「頼ちゃん、昼食の付け合わせ  
のマカロニサラダの試食を、大  
奥にお願いします」

「承知致しました」

働きはじめて1年も経つと、  
大奥への検食係がすっかり頼子  
の仕事として定着し、板に付い  
てきた。

頼子は結局、民子との関係を  
明らかにすることができなかつ  
た。頼子は民子との関係が、民  
子の認知症による症状なのか、



頼子が民子を思い出せないのか、  
理由などもうどちらでもよく  
なっていた。ただ、1年かけて  
構築した2人の関係だけを記憶  
に留めることにした。

「民子さん、マカロニサラダの試  
食をお願い致します」

「はい」

民子はいつものように、試食  
用のマカロニサラダを受け取る  
と、ゆっくりと噛みしめるよう  
に試食した。

「頼ちゃんありがとう。おいしゅ  
うございました」

民子は頼子に笑顔で会釈した。  
「ありがとうございました」

そう云って頼子は一礼すると、  
事務所を後にした。

「礼子さん、マカロニサラダ、民  
子さんの合格が出ました」

「承知致しました！ 頼ちゃん、  
時間ですので上がってください。  
お疲れ様でした！」

「はい、それでは失礼します」

勤務時間終了の9時半になつ  
たので、頼子がタイムカードを  
押して、更衣室に向かおうとし  
た時、背後から礼子が追ってき  
て頼子に声を掛けた。

「頼ちゃん、今日のお昼付き合っ

ていただけませんか？」

「はい…」

「今日は義母もご一緒致します。では、私が12時に頼ちゃんの自宅へ迎えに上がりますので、自宅待機してお待ちください」

礼子からの誘いは初めてのことで、頼子は少し戸惑ったが、断る理由もないので了承した。

〈2〉

「ごめんください」

「は～い」

礼子の迎えに玄関に出てみると、礼子が見知らぬ男性を連れ立っていた。

「初めまして、田辺雄一と申します。いつも母ならびに礼子がお世話になっております」

そう云うと、雄一は深々と頭を下げた。

「初めまして。成輪頼子です」

頼子は、男性が礼子の夫と分かると、田辺家が一家揃って何事かしらと首を傾げた。

「頼ちゃん、ごめんなさいね。事情は車の中で主人がお話し致します」

礼子が頼子に耳打ちした。

頼子が玄関を出ると、雄一の誘導によって、黒のクラウンの運転席後ろのドアが開かれた。中には先に乗り込んでいた民子が、頼子を笑顔で招き入れた。「頼ちゃん、こんにちは。今日はありがとう」

「はい…」

事情が呑み込めない頼子は、笑顔を繕いながら浮かない声で返事をした。

車が走り出すと、雄一が頼子に語りかけた。

「本日はご無理を申し上げました。実は先日社長から、母と家内をも含めて私共一家がお食事の誘いを受けました。用向きを伺ったのですが、食事の席で話されるとのことで、私も社長が何をお話しになるのか存じ上げません。ところが、その旨を母に伝えましたところ、なぜだか分からないのですが、頑なに拒否致しまして…。途方に暮れていたところ、礼子が“成輪さんも一緒にいただくから”と母を説得すると、渋々承諾したと云うのです。社長にその旨を伝えると、“民子さんがそう仰るなら、成輪さんも同席していただいても構わない”とのお返事をいただき、本日長野市内にあるホテルで13時より昼食会を行うことに相成った次第です。礼子には、成輪さんに断られると困るから、ぎりぎりまで待ってお願いしてほしいと私から頼んだものですから、急な上に、誠に勝手なお願いで恐縮致しますが、よろしくお願い致します」

事情を説明する雄一の話は、恐縮と懇願が交じり合っていた。「頼ちゃん、無理を云ってごめんなさいね」

後部座席の隣に座った民子が謝ると、助手席に乗っていた礼子も後部座席を振り返って頭を下げた。

「頼ちゃん、騙し討ちみたいで本当にごめんなさい」

「いいえ……」

頼子は、とんだところに巻き込まれてしまったという思いが頭を過ったが、恐縮する3人に対して返す言葉が見当たらなかった。

指定された時間より15分早くホテルに到着すると、レストランの個室が用意されていたが、田中はまだ到着していなかった。

テーブルのいすに座ると、緊張で落ち着かない様子の雄一、礼子、頼子を余所に、頑なに拒否していたはずの民子は至極落ち着き払っていた。

結局田中は、指定時間より10分遅れて到着した。田辺家ならびに頼子は、一同立ち上がって一礼し田中を出迎えた。

「いや、遅れてすみません。皆さんどうぞお掛けください。午前中の会議が長引いてしまいました。お呼び立てしたのに申し訳ありません」

田中が皆に向かって丁寧に詫びると、田中を案内したウエイトレスがいすを引いて田中を座らせた。

「今から話を致しますので、食事を10分後から始めていただけますか」

「承知致しました」

田中の指示でウエイトレスが部屋を出ると、徐に田中が口を開いた。

「本日はお忙しい中、田辺家の皆様方にはお集まりいただき、誠にありがとうございました。また、成輪さんにもご臨席を賜り

恐縮致します。ありがとうございました。…本日お集まりいただいたのは……」

頼子は場違いな参加に戸惑いを隠せず、田中の言葉を遮るように立って発言した。

「すみません、社長。私は席を外させていただきます」

すると、民子が頼子の袖を掴つかんで座らせようとした。

「いいの。座って…」

民子の威風堂々とした振る舞いに、頼子のみならず、雄一や礼子までもが固唾かたずを飲んで見守った。

「いや、民子さんの仰るとおりになさってください。本日成輪さんは、田辺家の一員ということでご参加いただいておりますので、どうぞお座りください」

田中が穏やかな口調で頼子に座るように促した。頼子が座ると、田中は何もなかったかのように自分の話を続けた。

「本日お集まりいただいたのは、当社の後継のお話です。私も知らぬ間に歳を重ね、82歳となりました。私はまだまだやる気に満ちていますが、残念ながらこの歳になりますと、自分の意志とは裏腹に、いつお迎えが来るとも限りません。そこで、後任の社長として雄一君に食分を継いでいただこうと考えている次第です。社長を継いでいただくにあたり、田辺家の皆様方との交流をさせていただこうと、この席を設けさせていただきました。本日はどうぞ遠慮なくお楽

しみください。雄一君、これから食分を頼みます」

田中は静かに頭を下げた。それを受け、雄一と礼子も頭を下げた。

顔を上げた雄一は、緊張のためか大きく息を吐き出すと、意を決したかのようにすっと立ち上がり、田中に向かって一礼した。

「謹んでお受け致します。誠心誠意やらさせていただきます」

その言葉を聴くと、田中も立ち上がり雄一とがっちり握手した。

握手を解くと、田中は視線を民子に注いだ。民子は田中と視線が合うと、逸そらすように目を閉じた。

「民ちゃん、ありがとう。よい息子を育ててくれて」

田中はそう云うと、民子に頭を下げた。

田中の言葉を、眼を閉じて聴いていた民子の頬を涙が伝った。

その涙に呼応するかのように、頭をなかなか上げない田中の肩が震え出し、次第に田中が嗚咽しはじめた。

「あ…うっうっ…ありが…うっうっ…とう…」

田中の声は言葉にならなかった。

「社長、大丈夫ですか？ いすにお掛けください」

隣にいた雄一が抱えるようにいた旁わらわり、田中をいすに座らせた。

その後もいすに座ったまま嗚咽する田中を、民子を除く一同は、何が起きているのかよく分



からないまましばらく見つめた。

しばらくして、田中がハンカチで目を拭い、顔を上げるとそこには晴れやかな笑顔があった。

「歳を取ると涙腺が緩くなってしまって…年甲斐もなく泣いてしまいました。すみませんでした。さあ、お食事にしましょう」

田中がそう云うと、タイミングを図ったかのように、ウエイトレスによってランチコースの食事が運ばれてきた。

〈3〉

田中が雄一を社長に指名した食事会から、約半年が経った9月1日、長野市内にあるホテルのパーティー会場では、株式会社食分の幹部、関係団体300余人を集めて、株式会社食分の社長就任パーティーが開かれた。「只今より、株式会社食分社長就任式典ならびに田辺雄一を囲む会を開催致します。では初めに、社長挨拶。株式会社食分代表取締役社長、田辺雄一よりご挨拶申し上げます」

司会者の開会の挨拶の後、雄一が壇上に上がって立派にスピーチを行った。

雄一の挨拶が終わると、会場は割れんばかりの拍手に包まれた。

就任パーティーでは、社長の身内席の末席に用意された礼子と民子の席の横に、民子のお守り役として頼子の席が用意されていた。

来賓祝辞、祝電が披露された後、乾杯の発声と共に会食会が始まった。

一人ひとりの座席には、本日のメニュー表が谷折りにして立て掛けてあった。

「お義母さん、メニューをお読みしますね。先付けは、菊菜の御浸し、銀杏、茶豆、お凌ぎは鯛寿司、お椀は松茸土瓶蒸し、鱧、生麩、京三つ葉、向付けは本鮓、戻り鰹、石鰈のお造り、強肴は甘鯛の若狭焼き、焼き物は黒毛和牛の柚香焼、ズッキーニ、煮物はしみ豆腐と冬瓜の含め煮、ご飯は太刀魚の釜飯、止め椀は浅瀬の赤出汁、香の物は盛り合わせ、甘味が無花果の杏仁豆腐となっています」

礼子が民子に向けてメニュー表を読み上げると、民子は頷き静かに耳を傾けた。

しかし、いざホテルのウエイトレスが、料理を先付けからテーブルに乗せ、民子が料理に箸を付けはじめると、一変して批評が始まった。

「頼ちゃん、茶豆が余熱で茹で過ぎられていますので、色が悪くなっていますよ。風味が損なわれていますし、塩分も少し多い

わ。やり直してください」

「はい。承知致しました」

頼子は民子の批評に返事をしながら、民子の席を挟んだ向こう側に座っている礼子に、助けを求めるように目配せをして苦笑いした。礼子も目配せに応じて頷いた。

就任パーティーも滞りなく進み、会席料理も、民子の批評に晒さらされながらも、とりあえず全品テーブルに出し終えられた。「頼ちゃん、無花果の杏仁豆腐はおいしゅうございました」

会席料理最後の甘味である、無花果の杏仁豆腐に民子から合格のサインが出ると、呼応するように司会者がマイクを取った。「皆さん、宴も酣ではございますが、会も終わりが近づいて参りました。それでは、この会の最後に、前社長で在られます田中寅吉様より、ご挨拶を賜りたいと存じます」

司会者の誘導によって、田中が盛大な拍手と共に壇上に上がった。

「皆さん、本日は弊社食分の新たな門出にご参集いただきまして誠にありがとうございました。

食分に流れる私の血液も、食分を支えてきた私の自負という骨も、食分が生み出す私の食事も、すべて田辺雄一新社長に受け継がれていくことでしょう。そして、私以上に食分を大きく発展させていってくれることでしょう。本日社長の就任を見届け、安堵の気持ちで一杯です。本日

の心境は“老兵は死なず、ただ消えゆくのみ”というところでしょうか。本日この場をお借り致しまして、関係各所の皆様方に対しまして、今までの食分ならびに私へのご厚情を感謝致しますと共に、今後共食分ならびに田辺社長をご愛顧いただきますよう、よろしく願い申し上げます」

田中が深々と頭を下げると、大きな拍手が沸き起こった。「それではここで、60年にわたり食分社を支え続けてみえた田中社長に、食分社職員一同より感謝の意を込めて、花束の贈呈がございます。贈呈者は52年間にわたり、田中前社長ならびに食分の味を支え続けてみえました、田辺社長のお母様で在られます田辺民子様です。よろしく願い致します」

田中を称える大きな拍手は、司会者のマイクの声掻き消した。

頼子に支えられるように民子が花束を持って壇上に上がると、民子は頼子を制して歩き出し、田中と民子はお互いに引き寄せられるように壇上で向かい合った。

会場のボルテージが一層上がる中、民子が頭を下げた田中に花束を渡すと、田中が頭を下げながら民子に耳打ちした。

「すべて民ちゃんのお蔭だ。食分は貴女の子どもです」

すると民子が、拍手で音が掻き消される中、田中に耳打ちを返した。

「いいえ、2人の子どもです」

2人は目配せして微笑んだ。  
そこに涙はなかった。

鳴りやまない大きな拍手の中、  
2人は別々に壇上を降りた。

頼子は就任パーティーを終え、  
雄一の手配した食分社長秘書  
兼運転手の黒田に送られ自宅に  
帰ると、真っ先に仏壇の前に座り、  
誠治の遺影に語りかけた。  
「誠治さん、雄一さんの就任ス  
ピーチは立派だったわ。私は場  
違いで恐縮しちゃったけどね。  
それと、田中社長も夜来香よ。  
最後の残り香が素敵な香りを  
放っていたわ。壇上に上がった  
民子さんも素敵だったわ。やっ  
ぱりあの方は夜来香よ。あ～そ  
れからね、誰にも云わないけど、  
私、田中社長と民子さんは何か  
特別な関係があるように思えて  
いるの。2人にしか分からない、  
何か深い関係がね…。まゝ人の  
ことはさて置いて…。私は9月  
11日で、もう67歳よ。まだ夜来  
香のように香れていないみたい  
だけれども、どうしようかな…」

### 3. 夜来香

今年の夜来香は頼子の誕生日  
に咲いた。

その誕生日に、就任パーティー  
の時のお礼と云って礼子が頼子  
の家を訪れ、食分のケータリン  
グで頼子の誕生日会を催してくれ  
た。

「お誕生日おめでとう！」

祝福を込めて、礼子が乾杯の  
発声を行った。

「ありがとうございます」

頼子が応えると、礼子が  
間髪入れずに尋ねてきた。  
「頼ちゃん、いくつになった  
の？」

「67歳…」

「67歳には見えないわ。  
だって頼ちゃん素敵だし、  
輝いているもの！」

「からかわないでください」

頼子は顔を赤らめて頭を振っ  
た。すると、礼子が真顔で話し  
てきた。

「聴いて、実はね。頼ちゃんがう  
ちに来て間もない頃、お義母さ  
んがいきなり“頼ちゃん”と呼  
び出した時があったでしょ。あ  
の時、頼ちゃんが怪訝そうな顔  
をしたでしょ」

「ごめんなさい。実は私、民子さ  
んのことを存じ上げないの」

「謝らなくてもいいのよ。私は、  
あの時、知り合いではないと直  
感しましたから。正直、お義母  
さんの認知症の症状が出てきた  
のかなぁと思いました。でも、  
頼ちゃんの立ち居振る舞いを見  
ているうちに、お義母さんの  
仰った“頼ちゃんは風車のような  
人”という意味がよく分かつ  
たの。私はお義母さんを昔から  
尊敬していますが、初対面で頼  
ちゃんの本質を見抜くとは、凄  
い人だと、改めてお義母さんのポ  
テンシャルの高さに敬服したわ」  
「買いかぶらないでください」  
「いや、お世辞ではありません。  
頼ちゃんは本当に風車のような  
人です。人の起こす風を正面か



ら受け止めて立ち回ってくれる  
人です。実は、頼ちゃんがうち  
に来る前のことですが、お義母  
さんが認知症と診断されてか  
ら、工場で働く誰もが、陰でお  
義母さんのことを馬鹿にするよ  
うになったの…。お義母さんの  
味覚は、頼ちゃんもご存じのと  
おり、今でも誰にも真似できな  
い素晴らしい業です。現役時代  
は誰もがお義母さんのことを、  
その業への敬意から“味助菩薩”  
と云って尊敬していたのに、認  
知症と分かった途端“耄碌菩薩”  
と揶揄するようになったの。流  
石に認知症と診断を受けては、  
お義母さんも退職を余儀なくさ  
れたけど、家にいても認知症が  
進行してはいけないと思って、  
何とか私とその業を活かそうと、  
主人に掛け合って事務所内に留  
まっていたのだ。頼ちゃん  
がうちに来てくださったのは、  
それから2年経過してからのこ  
とよ」

「そんなことがあったのですか？  
…知りませんでした。今では工  
場の皆さんも民子さんに敬意を  
払ってみえますので、それが事  
実とは、俄かには信じがたいの

ですが…」

「頼ちゃんが工場の雰囲気を変えてくれたのよ」

「いや、私などは何もお力にもなっていませんよ」

「何を仰っているの！ ご存じないの？ でもそれが、頼ちゃんのことをお義母さんが風車と仰る所以よね。正面からの風に風車は回っても、<sup>よこしま</sup>邪な横からの風には風車は回らないものね。頼ちゃんには、そういう力があるの。頼ちゃんは認知症のお義母さんの起こす風でも、正面から吹いてくる風をしっかりと受け止め、立ち回ってくれた。お義母さんの業を純粋に受け止め、認知症と馬鹿にすることなく、人として真摯な態度で接してくれた。その姿を見た工場の皆が、頼ちゃんの純粋さ、人としての在り方に心打たれたのよ」

「そうでしょうか…」

「そういうところが頼ちゃんらしいよね…」

20時を過ぎたところで、程よくお酒が回ってきた礼子が、中秋の満月を見ようと窓を開けると夜来香の香りが漂ってきた。「良い香り…頼ちゃん、これは何の香り？」

「夜来香です。夜来香は夜に来る香りと書き、20時過ぎから強く香るのです。亡くなった夫の形見です。でも、どうして夜に香るのでしょうか？ 生前夫から聴くのを忘れていました。礼子さんはどう思われます？」

「それは、夜行性の虫に受粉さ

せるためじゃないのかしら？」

「受粉？」

「種を残すために、植物は受粉しなければならないでしょ。そのために、風や虫の力を借りるのよ。香りや蜜は虫を呼び込むための手段だと思うわ。虫を香<sup>おび</sup>りで誘き出して花粉を虫に付け、受粉させるのよ。多分間違いないと思うけど…」

「ありがとうございました」

『そうか、受粉か…』

頼子は夜来香が香る意味が、何となく理解できたような気がした。

礼子が自宅に帰ると、頼子はいつものように仏壇の前に座った。すると、小布施に來た初めての夜、誠治の云った言葉が甦ってきた。

『20時頃から強く香る夜来香は、24時間の人生に例えると67歳になって香りはじめるということになる。どうだい、僕たちも社会の一線は退いたけれども、夜来香のように、老いてなお、強く香るような魅力ある人間になりたいと思わないかい？』

「そう思うわ、誠治さん。礼子さ

んが仰っていたけど、私は輝いているんですって。本当かしら？ でも、そうであるならうれしいわ。私も夜来香ってことなのかなあ？ …今日、礼子さんが教えてくれたの。夜来香が花を咲かせて香るためには、受粉が必要だって。ということは、私の花を咲かせてくれたのは、民子さんと礼子さん。民子さんの香りを礼子さんが嗅ぎ付けて、民子さんの花粉が礼子さんに付着した。その花粉を礼子さんに届けられて私は受粉され、花を咲かせたのね。じゃあ、事業団の荒木さんは、山本さんに花粉を付けて、他の事業団で働く方に受粉しているのかしら？ …田中社長は雄一さんに花粉を付けて、食分社で働いている方に受粉しているのかしら？ …夜来香は社会にとって必要な花よね。私も夜来香の香りをもっと振り撒かなくちゃ……」

頼子はそう云って笑うと、闇に拡がる満天の星空と夜来香の香りに包まれながら、全身で幸せを感じていた。